
Paranoia Paradigm

鴨川

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

P a r a n o i a P a r a d i g m

【Nコード】

N 1 6 4 9 B A

【作者名】

鴨川

【あらすじ】

いつの間にか賞金首になっていた少年が、その理由を探りつつ逃げたり戦ったりしながら色々彷徨うPPG風のよくありそうな話です。

序

「苦しんでる父さんを見るのは嫌だ、辛い、だから助けるんだ。」
「お父さんを助けてくれる人はお金をたくさんくれって言ってるんですよ？」

僕たちは子供だ。

「子供だから」という理由一つで出来ない事がたくさんある事を知った。

僕たちは子供だから大人の世界がわからない。
でも、家族を助きたい気持ちに子供も大人も関係ないと思いたい。

僕たちは子供だから僕達の無知に気付けない。

自分たちの言う「子供」と、大人達の言う「子供」の温度差を考
える事なく、ただひたすらに抜き身の刃を振りかざし走り回る。
それが自分たちにできる必死の抵抗だと云わんがばかりに。

決して間違っではないと云わんがばかりに。

手に握られた刃物の狂気に気付かないままに。

序（後書き）

亀ペースで思いつくままに書いていきます。読み難いかと思います
がよろしく付き合ってやってください。

茶色のフードを目深に被った少年―テレストは適当な建物の屋根に上り、周辺を見渡した。

黄昏時の空に、煉瓦造りの街並みと町を彩る灯がよく映えて、街の賑わいをより感じさせる。

この町は交易路の中継点にあたるため人々の往来は多いが、混沌とした雰囲気は少なく整備が行き届いているように見える。

町の中心人物が才腕の持ち主なのだろう。

しかし、一見安定した町でも集まる人が多ければ比例して陰の部分も広く深くなるらしく、この町もそういった陰の部分がコミュニケーションとして町に根付いているらしい。テレストが目落とした先にある路地も、所謂そういった町の陰の部分にあたる。

裏家業の巢窟、あるいはフラストレーションの掃き溜め口と位置付けられ、同種の人間でなければ立ち入る事もないこの裏路地に、テレストは先刻まで足を踏み入れていた。

裏路地で見聞きしてきた事を思い起こし、つい嘆息する。

「景気悪そうね」

いつの間にか彼の数歩後ろにアマルティアが立っていた。

「……まあ…、現状確認が出来ただけでも良いことにする」

テレストはこの路地に来る前に、アマルティアに宿で待つよう指示した。その少女が、今ここにいる事に内心焦慮したが、今更、と思ひ直し適当に応じる事にする。

だが、この場所はアマルティアのような少女が来る場所ではない。出来るだけ長居させたくないと思い、極力自然に帰路を促した。

「これ以上ここにいても仕方ないし、寒いだろ？とりあえず宿に戻ろう」

思い立ったように踵を返すと、マル、と一言呼んで先導する。

それぞれ無言のまま足早に裏路地を出口に向かって進み、抜けたと同時ににどちらからともなく嘆息が漏れた。どうやらそれなりに緊張していたらしく、表情の緩んだ様子を見合わせると思わず破顔してしまう。

それでも緊張を解くにはまだ早いと仕切り直して、改めて宿へ向かおうとしたその矢先、テレストは何かを感じ取ったかのようにふと今来た道を振り返った。

「テツ？」

アマルティアは怪訝そうに尋ねるが、テレストは半ばはぐらかすように応える。

「……多分気のせいだ……と思う。気にすんな」

そんな言い方をしたらかえって気になる、とアマルティアが言及すると、テレストはいつもの事だから、とただ苦笑するだけだった。

二人は雑談を交わしながら宿への道を進む。

少し肌寒さを感じる季節ではあるが、道行く人々の活気にある程度寒さも紛れ、通りに沿って立ち並ぶ露店に目が和み雑談にも華が咲く。

二人はこの町に入るまでに経験した惨事に、お互い口には出さないものの心身ともに疲弊していた。それだけに二人にとって今のこの時間は随分な癒しになった事だろう。

だが、テレストは雑談に興じつつも、先程の違和感を払拭しきれずにいた。

「お部屋はお二つでしたね。同室で広いお部屋にも替えられますが？」

「結構です。そういう関係じゃないですし」

宿に戻り、部屋の鍵を2つ手渡しながら言うフロント係をアマルティアが斬り捨てる。

思わず呆氣にとられる係員に、テレストは鍵を受け取りながら苦笑気味に幼なじみで姉弟みたいなものだと言い添えた。

挨拶を程々に済ませ、階段を昇った先の客室に入ろうとしたテレストは、ふと傍らに当たり前のように立つアマルティアを見やる。

「…おまえの部屋は隣だ、ちゃんと鍵渡したろ？」

「うん、もらったよ」

「だったら……………」「そういう関係」だと誤解されるぞ」

「まだ早い時間だから大丈夫。あんたの部屋と一緒に食事する事にすればいいの」

至極当たり前の事のように言うアマルティアに、ちょっとした悪戯心がテレストに起きた。極力声を低くして脅しを含めた口調で言う。

「襲われても文句言えないぞ？」

アマルティアは顔をきょとんとさせてテレストに尋ねた。

「襲われるって何に？押し込み強盗でもあるの？あんた予言に目覚めたの？」

その反応にテレストは思わず閉口してしまう。

「…流れで察しろよ……………」いや、あのな…俺が言いたいのはそういう事じゃなくてだな…」

返答に困り、意味もなく足下の床面に目を落とし木目の流れに目を泳がせる。

自身の発言が失言だったと悔い始めた所でふと顔を上げると、様

子を伺っていたアマルティアと目が合った。

アマルティアの目は据わっている。心なしか微笑んでいるように見えるが決して質の良いものではない。

「……あんたにそんな甲斐性が無いの知ってる私に、そっちの脅しが効くと思ってるの？」

「……………」

テレストが固まった。

しばらく後、少しずつ笑いがこみ上げてきた。冷やかすつもりが逆に返され見事に迎撃されてしまい思わず苦笑してしまう。

テレストはこの少女にはとても敵わない、と改めて実感した。

冗談だ、赦せと軽く詫びて部屋に招き入れる。

アマルティアが何故ここまで着いてきたのかおおよその検討がつく。テレストは脱いだフードを窓際の杭に掛けながら、これから起こる質問攻めに身構えた。

「裏路地で取ってきた情報を併せて現況を教えて。できるだけ端的に、解り易く」

部屋の扉を閉めての開口一番がこれだ。

テレストは考えをまとめるせめてもの時間稼ぎのつもりでアマルティアに席と水を勧める。

水を受け取りはしたものの、アマルティアはテレストから視線を外さない。早く質問に答えろと無言の圧力を掛ける。

これには流石にテレストも気圧され、考えを無理矢理まとめて半ばたどたどしく話し始める。

「…確かに俺は賞金首になっていた。手配書で見たから間違いない。ここで出てるんだったら、国土全域に回っていると考えた方がいいと思う。」

ただ、思っていたより人相とかがいい加減だから、こっちが正体を明かさない限りはそこの賞金稼ぎはやり過ぎそうだ。でも、それも俺次第だろうが時間の問題だろうな…。あと、故郷で夜討ちした奴らがいただろ？あいつらが先陣切って出てきたら………その時はアウトだな」

テレストは夜が始まった窓外の景色を見やりながら淡々と述べる。その表情は様々な感情が入り乱れているようで読み取りにくいものだった。

アマルティアは何も言えず、沈黙に耐えかねたように先程受け取った水を一口飲み込む。

テレストは窓の外を、アマルティアは手の水が注がれたグラスに目を落とし、暫く沈黙が流れた。

「夜討ち」―これが全ての始まりだった。

テレストとアマルティアは、元はこの町より遙か北にある山岳地帯中腹の、避暑地として好まれるのどかな村で暮らしていた。

テレストは農耕など村の事業に参加しながら自活する、教会の保護を受けた孤児で、アマルティアはその教会の娘だった。

二人とも真面目でよく働くので村民からも大事にされ、何不自由なく屈託を感じる事もなく日々を送っていたが、ある出来事にその日常は崩れてしまう。

アマルティアはグラスの水が描く波紋を見ながら「あの日」を振り返った。

全ての始まりの「あの日」を。

その日、テレストは村の農作業に参加し、一環として薪取りに森へ入った。

普段なら二・三時間で戻ってくる所をその日は日没を前にしても戻らず、周囲の者が搜索を始めようとした頃、森と村の境にあたる草藪で倒れているのが見つかった。見た者誰もが顔を顰めるような全身緋色に染めた姿で。

すぐにその場で介抱が行われようとしたが、意識の戻らない顔色は蒼白で、衣服も凄惨な程に血に濡れているのに、その身体には何処にも傷がない。

朦朧としながらも意識を取り戻したテレストに周囲の緊迫した空気が次々を疑問を投げかけたが、ただ自分の姿を見て「なんだこれ」と言うだけで、何も覚えていないようだった。その後様々な憶測が飛び交ったものの、どれとして釈然とする物はなく、最終的には森で熊等の獣に襲われ、振り返りにしたもののこの場で力尽き、その

時のショックで一時的に記憶を失ったのだらうという事で落ち着いた。

テレストは自分の行動を覚えていない事がショックだったらしく、獣と遭遇したのなら証拠を探してくると再度森に入ろうとしたが、日も暮れ危険だと周囲に止められ、しぶしぶながら従い村へ戻った。いくつかの疑問を残しながらも村は普段の落ち着きを取り戻したが、それは全ての始まりの一端に過ぎなかったらしく、それぞれが寝静まった深更刻、事件は起きる。

その頃、アマルティアは血塗れの姿で倒れるテレストの姿が脳裏に焼き付きなかなか眠れずにいた。

何度目かの寝返りをうった時に突然聞こえた静寂を貫く破砕音に胸騒ぎが走り、本能のままテレストの住居への道を駆けた。

「……大丈夫か？」

呼びかける声に一旦アマルティアの回想は中断される。見ると、テレストが心配そうにアマルティアを覗き込んでいた。

先刻までは窓辺に凭れていたのに、いつの間にかアマルティアと小さなテーブルを挟んで向かい合わせに座っている。返事を待つテレストにアマルティアは少しはにかみ、そんなにボーツとしてた？と返した。テレストは何も言わずただ頬を緩める。

「……なんていうか……色々整理しようと思っただけこれ振り返ってた」
「……ああ……そうか……そうだよな……」

それぞれ思う所があるらしく、お互い天を仰ぐ様に天井から垂れる照明を意味もなく見上げた。

先に視線を戻したのはアマルティア、未だ天を仰ぐように天井を見上げるテレストを見て、溜息をこぼす。

「あんたが怪物ねえ……」

そういった物とは最も縁のない人間だと思っていた温厚な気質の、弟のように感じていた幼なじみがある日を境に「怪物」と称されるようになった。

「俺が怪物……なあ……」

本人も不愉快というより不思議で仕方ないらしい。溜息と一緒に漏らした呟きを聞き取り、天を仰ぐ姿勢を崩さないまま反復した。そしてふと、何かに思い至ったようにアマルティアに視線を戻す。

「俺が怪物なら、マル、お前は何だ？」

「あなたが怪物なら……そうね、私は調教師？怪物の手綱取れる凄腕の」

アマルティアは自信たっぷりに返す。

テレストはそんなアマルティアを眩しそうに眺めながら、言いようのない不安感や罪悪感に苛まれていた。

もやもやした感情を振り払うようにテレストはアマルティアに食事を勧める。元々一緒に食事をするという名目で部屋を共にしているのだ、ルームサービスを頼んだ方が自然だろう。

アマルティアも提案を受け入れ、軽い食事をフロントに頼むと程なくして部屋に食事が運ばれてくる。その内容は一口サイズのパンが数個とスープと軽めのサラダという簡素なものだった。

「下のレストランならもっと楽しめると思いますが…」

料理を手渡しながら給仕係は自慢の料理でも振る舞おうとしてくれていたのか、少し寂し気に言う。

「ごめんなさい…。私達、今日はもう疲れててそんなに食べられないんです。これっぽちの量じゃ賑やかなレストランは勿体ないです。元気になったらお邪魔しますね」

「そうですか、それではゆっくりお休みください」

お互い罪悪感を覚えたのか申し訳なさそうに頭を下げると、給仕係はそれなら仕方がないと思っただけ、にこやかな表情に戻り挨拶をしながら部屋を出て行った。

部屋では簡潔な食事が始められる。テレストは水を口にしながらアマルティアの食事が一段落するのを待つ。

食事の間もなく終わる頃にテレストは話を始める。

「お前さ、明日は適当に町の観光でもしててくれよ」

「別行動ってこと？」

「そう。ちよつとな」

「裏路地？」

「さあ…そこかもしれないし、別の所かもしれない。ちよつと思う事があつてさ…一人の方が空振りしてもダメージ少ないしさ」

「ふうん……」

肝腎な事は言ってくれないんだ、と暗に非難するように返事をするアマルティアに、それを感じ取ったのかテレストは少し焦ったように続けた。

「本当に思い過ぎかもしれないんだ。ほら、裏路地出た後、なんか妙な感じしてさ……。それが何だったのかももう一回行ったら判るかなーってだけなんだ……」

「……………」

「……………」

少し探るような眼差しを向けるアマルティアに、テレストはそれ以上はないと黙って見つめ返す。

先に折れたのはアマルティアだった。

「わかった。じゃあ、色々足りない物も出てきたし明日は買い物でもしてるよ」

「ああ、そうしてくれ」

概ねの予定が決まり、明日に備えて今日はもう休むという話になり、食後の片付けを済ませアマルティアは自室に戻っていった。

自室に入るアマルティアを見送った後、テレストは部屋の窓枠に凭れ夜も更けた街並みを眺める。

その目はどこか翳りを潜めた物だった。

やがて彼等の泊まる宿の照明が静かに落ちた。

翌朝、簡単な食事を済ませ二人は宿を出る。

アマルティアは賑やかな商店街の方へ、テレストは前日訪れた裏路地の方へ向かう。

テレストはアマルティアが完全に人混みの中に消えた事を確認してから人々の死角に入り、壁の縁等に足を掛けて建物の屋根へ上り、屋根伝いに目的地を目指して走り出した。

フードで顔を隠してはいるものの、人通りの多いところは極力避けたく、何より近道だと思ったからだ。

屋根を走りながら、前日の事を振り返る。

アマルティアには「ちよつと気になる事」に止めたが、テレストが感じ取った物はもう少し具体性を持つ物だった。

それは殺気。

殺気に乗って聞こえた物は「化け物」・「町長」という二つの単語。

話の前後は勿論、声の主も判別できず、自身と関係があるかどうかどうかも解らない。

だが路地を抜けた所で喧噪に紛れて聞こえた声は確かな殺気を帯びており、何故か意識が向かい離れられなくなった。

やがて目的地付近に到着し、周囲を見回すが、特に気になるものは見あたらない。

まだ早い時間帯だからか露店の準備やこれから仕事に向かうらしい人々の往来が目立ち、昨夜とは別の賑わいを見せる通りに、つい喧噪の中で聞き取った物の真偽が脳裏を掠めてしまう。だが念のた

めしばらく様子を見る事にした。

死角になりそうな屋根の凹みに移動し横たわると、朝の陽を頌えた青空が眼前に広がる。

「化け物」……

テレストは眩しそうに青空を眺めながら聞き取った言葉を反芻した。

「怪物」の称を持つテレストにとって、この「化け物」の正体は関心をかきたてられた。

もし自身の事ならどんな意図を以て殺気を放ったのか、或いは別の何かなら、その「何か」は何を以て「化け物」と称されるのかと。

ふと、自身が初めて「怪物」と呼ばれた時の事を思い出してみる。テレストを「怪物」と呼び下卑た嗤いに怒号を乗せながら弓を射った中年の男。

その矢からアマルティアを退けようとして誤って身に受けた時、初めて自身の異常を知った。

その異常こそが「怪物」たる所以。

何故こんな事にと、その思いはことある毎に沸き起こる。その度に塞ぎ込みたい衝動にかられるが、周囲の状況がそれを赦さない。そんな殺伐とした道を歩むには「怪物」と化したこの身は丁度いいのかもしれないと思った所で強引に思考を断ち切った。

改めて見る現前の景色は澄んだ青が広がっていた。

青空と下から聞こえる喧噪に包まれながらゆっくり時は流れていく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1649ba/>

Paranoia Paradigm

2012年1月5日22時45分発行